

【自分でできる牛の蹄管理の実際 # 3】

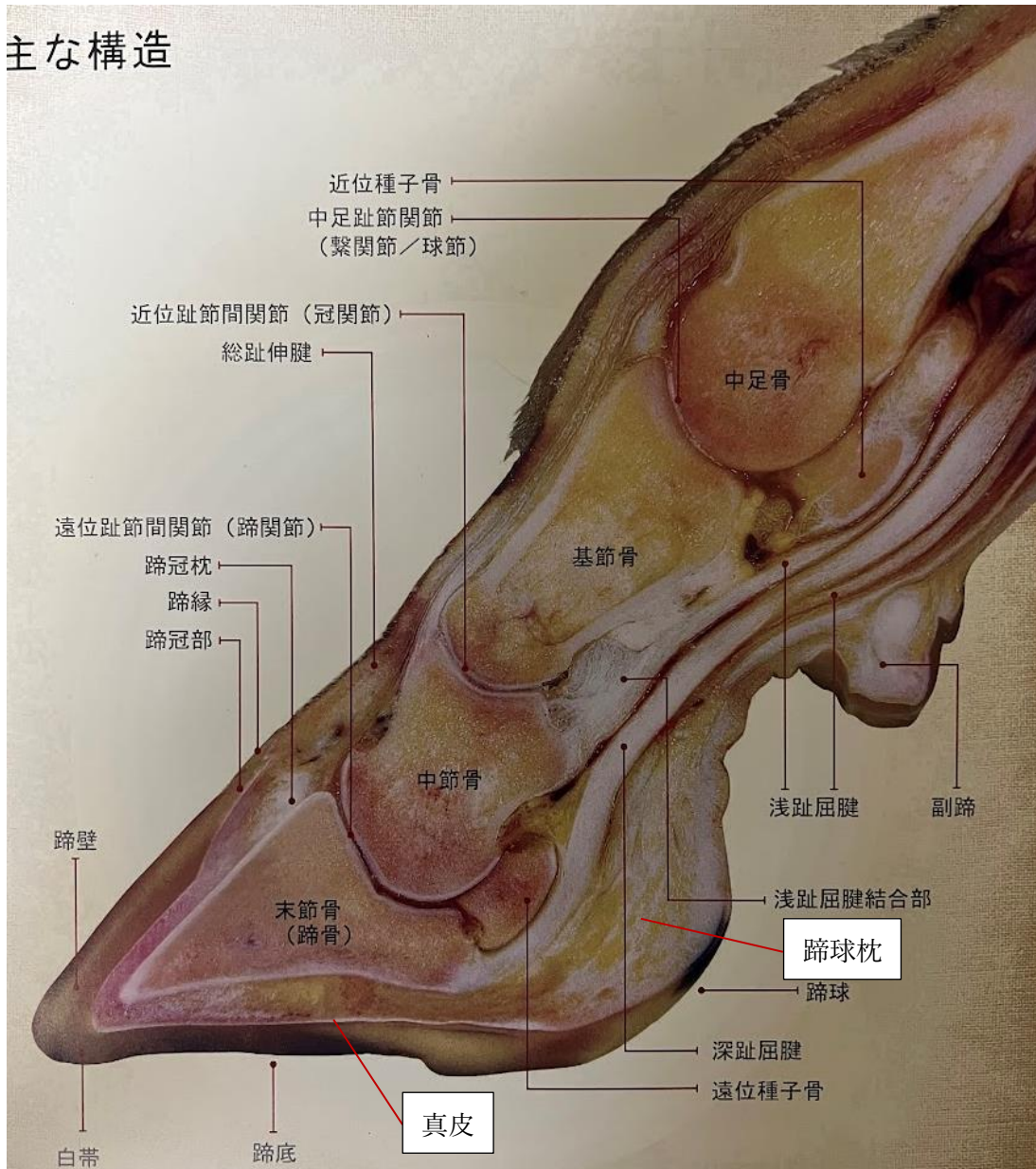
(株) トータルハードマネージメントサービス

阿部紀次

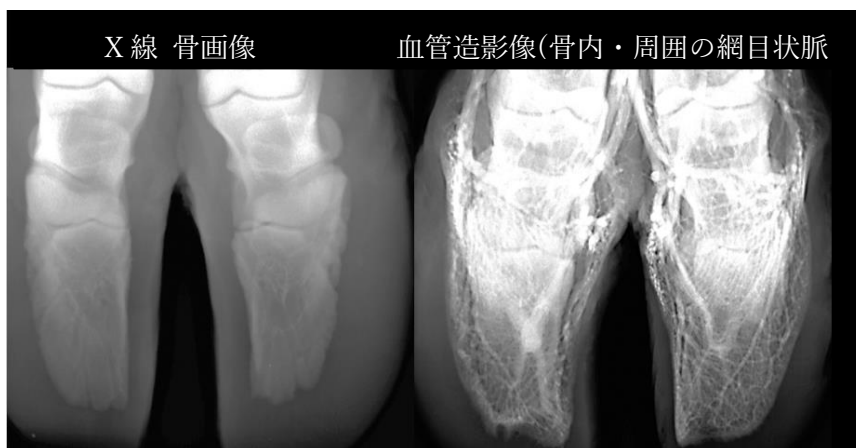
前回は蹄についての理解を深めるために、特に体表から見た目の用語を整理してみました。今回はもう少し解剖を知り、目指すべき削蹄について述べたいと思います。この図は、2014 アメリカ（2019 日本語版）で ZINPRO 社から出版された「牛の跛行」の中から特別に許可を得て転載するものです。



主な構造



牛の行動の中で、体重とその変化を多くの骨と関節が受けて、下方に伝えています。そして、体重が蹄底に向かって伝わる中で、浅趾・深趾屈腱が後方から支え、伸腱とのバランスで肢が立っているのです。したがって、蹄底面における負面（ふめん：地面と接している蹄底の領域）が適正だとバランスが取りやすく、逆に負面が不適當だとバランスが取りにくいということになります。適正な負面は、一個一個の蹄においても、また左右両蹄においても大事です。



また、蹄内部の血行も盛んです。蹄を取り巻く真皮には蹄骨など骨周囲や骨を貫く形で血管が縦横無尽に走っています。そして蹄の内部組織を網目状に

取り巻いています。写真は、血管に造影剤を入れてレントゲン写真を撮ったものです。治りの悪い感染性の疾患の場合、駆血しておいて趾の静脈から抗生剤を注入することで、局所への効果を狙うことがありますし、ひどい蹄病では麻酔もします。このレントゲン像から見て、趾の静脈へ麻酔薬や抗生剤を注入すると、両蹄に行き渡ることが良く分かりました。

これらの蹄内部の構造体や、血行をしっかり健全に護り、機能させるために削蹄を行うわけです。そこで原則として、蹄が伸びすぎてバランスを失っているものを適正に修復させるのが削蹄であり、それ以上に良くする事はないのです。平たく言えば、『やらないのも悪いし、やり過ぎも悪い』のです。『やり過ぎ』=『過剰削蹄』いわゆる『過削(かさく)』です。下の図で4種類の過削について説明します。



これらの過削が同時に全部起ることはまずないだろうと思われませんか？ 連動する者もあるのです。

連動して多発性に起こり得る過削蹄は A です。A 蹄の長さを短くすると、それにともない BCD も必然的に薄くなってしまいます。

また、蹄に角度をつけすぎると B の蹄尖部、負面が薄くなってしまいます (Thin Sole という言葉さえる)。それにともない、D 軸側蹄壁が薄くなり、この部分での白帯病が発生することがあります。

逆に、ABD が適正でも、C 蹄踵が過削されると、蹄踵寄りに蹄底潰瘍や白帯病が発生しやすくなります。蹄踵が低すぎると地面と近くなり、汚れの付着、ふやけ、または小さな傷から感染症 (趾間フレグモーネや趾皮膚炎) の発生リスクが高まります。

講習会などでよく聞かれることは、「どこまで削ってよいのか教えてほしい!」というまあもっともなご質問です。しかしながら、大原則はお教えできますが、基本的にはその牛その蹄は似て非なるものであり、それぞれです。しっかりと保険を掛けながら行う方が失敗しません (やり過ぎたらアウト)。昔から「削る技術・止める勇気」という言葉があります。他方で、高僧は一本の木の中からお釈迦様を掘り出す (取り出す) のだそうです。どうやったらお釈迦様になるのか・・・ではないのです。最近でいえば「チェーンソーアート」もそうですね。パーツを作って組み立てるのではなく、完成物をイメージして取り出す。これと一緒に。

最近地元の削蹄師さんと話す機会がありました。酪農現場の困窮は削蹄事情にも影を落としているようで、数件のお客さんが離農されたと聞きました。さらに、削蹄間隔が延び気味であることもうかがいました。要するに4か月おきだった間隔が5ヵ月だったり、6ヵ月だつたりに延長していくようです。それに伴うことは、伸び過ぎの矯正が”キツク“なることです。さらにリクエストとして、「次の削蹄までの間隔を伸ばしてほしいので、できるだけ短く・薄くしてほしい」ということです……

この考えは間違っています。なぜなら組織というものは、刺激に対して増生して補おうとしますから、蹄底に刺激を与えれば蹄は伸びやすくなるからです。ですから刺激にならないほど残すことが求められるのです。

現代農業五十嵐編集者は面白いことをおっしゃいました「『ロングヘアをショートにすると間が持てる』っていうのと違うのですね〜」。ハイそうなのです。それとこれとは違うのです。削蹄師が過削蹄の癖を持っているならどうしようもないのですが、飼い主側がそれを求めるパターンもあるとうかがっています。どうぞお気を付けください。「伸びを助長させといて、削蹄間隔を延長させる……」とか、「さらにそれを削蹄師のせいにおっ被せる……」。それでは良いことはありません。牛が苦しむだけです。

“Don't Over Trimming” “過削ダメ ゼツタイ” (我が社のTシャツから)



次回はいよいよ切り方に入ります。